

資料：アフガニスタンの言語状況

はじめに

さまざまな紆余曲折の歴史を経てきたこの国の言語状況は、その多様さで知られる民族構成を反映し、極めて複雑である。

アフガニスタンの主要な少数言語に関しては、記述文法こそモルゲンシュティルネの古典的名著に代表される、精緻な報告があり、言語体系のうえではある程度の知識を得ることができる。しかしながら、各言語の現状については、Encyclopaedia Iranica (1985)、Summer Institute of Linguistics International (以下 SIL)、等の報告を参照しても、言語数、話者数、言語併用状況のいずれにおいても、統一した見解がみられない。たとえば、Encyclopaedia Iranica ではアフガニスタン国内で話される言語は 32 言語とされるが、SIL による言語調査の成果をまとめた Ethnologue では実に 47 言語を数える。少数言語の記録をおもな活動目的とする SIL が、ペルシア語やパシュトー語の下位方言に独立した言語コードを与えている点を考慮しても、この開きはあまりに大きい。話者数についても、少数言語についてはいうまでもないが、公用語であるダリー語、パシュトー語に関してさえ、報告数に隔たりがみられる。

今なお信頼に足る人口統計すら得られていないアフガニスタンの現状を考えれば、言語調査の実現など当分先の話である。アフガニスタンの言語を概説するには、現在ではデータが十分とは言い難いが、本章では、Encyclopaedia Iranica と SIL の報告を中心に、国内で話されている言語をまとめ、公用語であるダリー語、パシュトー語の現状、さらに公用語をめぐる 20 世紀以降のアフガニスタンの言語政策について、みていくことにする。

なお、すでに知られているように、ダリー語とは、近年になって用いら

れるようになった、アフガニスタンで話されるペルシア語下位言語の総称であり、言語区分上はペルシア語に分類されるべきものである。このため本章では、とくにペルシア語とダリー語を対照する必要がある場合以外は、「ペルシア語」を用いる。

第1節 アフガニスタン国内で話されている言語

アフガニスタンで話されている言語

アフガニスタン国内で確認されている言語とおおよその分布域を、言語系統に沿って列挙した。少数言語のなかには、ペルシア語、パシュトー語への母語化が進み、消滅が危惧されているものも少なからず含まれる。

A. インド・ヨーロッパ語族

1. イラン語派

・西イラン語

ペルシア語（ダリー語）*第2節1. を参照。

バルーチ語（またはバローチ語）

アフガニスタン側の話者約20万人（1979）。西南部のバルーチスタン地方、および西北部のバルーチ・コロニーで話される。

・東イラン語

パシュトー語 *第2節2. を参照。

パラーチ語

カーブル近郊ヒンドウクシュ山間の数村落に分布。人口5000～6000人のうち、話者数600人（SIL）

オールムーリー語

ロガル州 Baraki Barak に分布。話者数50人（SIL）

バミール諸語（シュグニー語、ローシャーニー語、イシュカーシュミー語、サングレーチー語、ワヒー語、ムンジー語）

ワハン回廊からバミール高原部を中心に分布。ムンジー語は、ムンジャン渓谷間の村落で話される。

2. インド語派 (インド・アリア語派)

・ダルド諸語

パシャイー語, ガワル=バーティー語, シュマシュティー語, ティーロー (ティラーヒー) 語, ワタプーリー=カタルカラーイー語, グランガリー語, サヴィー語など

ヒンドゥークシュ山脈の南, スーリスターン地域周辺部に位置。スーリスターン語に隣接し, とくに混在して話される。これらの言語を母語とする言語集団は, コーヒスターニーと呼ばれる。

・現代インド諸語 (大多数はペルシア語あるいはパシュトー語との多言語併用者)

パンジャービー語, スインディー語, ラーンダー語

グジュル語, ジャカティー語

グジュル, ジャートと呼ばれる, 非定住で移牧を営む集団の言語。

3. スーリスターン語派

カティー語, ワイガリー語, アシュクーン語, ブラスン語, カンヴィーリー語, トレーガミー語 など

アフガニスタン東方部の山岳地帯, いわゆる旧カーフィリスターンで話される言語。「カーフィル諸語」とも呼ばれ, ダルド諸語の一語群としてインド・アリア語派に含める見解もあったが, 現在はインド・イラン語派を構成する第3支派とするのが定説である。

B. アルタイ諸語 (チュルク・モンゴル系)

1. チュルク諸語

ウズベク語, トルクメン語

アフガニスタン北部に分布する, ウズベク人, トルクメン人の言語。人口は各約 140 万人, 50 万人 (SIL)。

ウイグル語

バダフシャーン周辺村落に分布。

キルギス語

ワハン回廊パミール高原部に分布するキルギス系民族の言語。

アゼルバイジャン語, カラカルバク語, カザフ語

話者の大多数はダリー語, パシュトー語との多言語併用話者。

2. モンゴル系

モゴリー語

アフガニスタン中央部から北部にかけて拡散的に分布。SILによると, 母語としての話者は高齢者のみで, モンゴル系語彙の影響が強いダリー語との併用または母語化へと移行しつつある。

C. セム系

アラビア語

アフガニスタン北部の数アラブ系コロニーで使用。ペルシア語の影響が強いアラビア語方言。ペルシア語との併用。

D. ドラヴィダ系

ブラーフイー語

バルーチスターン地域に分布。バルーチ語あるいはパシュトー語の多言語使用。

E. その他 特定の職能・社会集団などで使用される言語

ザルガリー語

バーザール等で用いられる職業語・隠語。

ラーゼミー語

カーブル周辺で商人間等で用いられる共通語。言語名は lazem「必要な」-i「～の（言葉）」に由来。

バルカンーロマニー語, ドマリー語（ゴルバティー語）

いわゆるジプシーとされる集団の言語。一般にインド系とされるが、起源・所属系統については不明。

F. 未分類

タングシェウイー語（Darwāz 東方に分布, 恐らく Darwāzi に近い), ワルドゥーズイー語（イシュカシム地域西方の川域に分布, 恐らく西イラン語), マラヘル語（ロガル州 Baraki 北に分布, 恐らくオールムーリー語に近い), パリヤ語（未分類）など。

第2節 公用語の現状

——ペルシア語（ダリー語）とパシュトー語

1. ペルシア語（ダリー語）

アフガニスタンにおいてペルシア語を母語とする民族は、タジク、ファールスィーワーン、キズイルバーシュ、ハザーラ、アイマーク、モゴールである。母語話者人口は、CIA World Factbook では全人口の約50%、約1500万人余と推定されている⁽¹⁾。

「ダリー（Darī）語」は、上にも述べたとおり、これらの民族によって使用されるペルシア語下位言語の総称で、系統的には、タジク共和国の公用語タジク語と同様に、すべてイラン語派西イラン語の中心言語ペルシア語に属する。Darī（dar「宮廷」-ī「の（ことば）」）は、本来は、後にペルシア語と呼ばれることになる、サーサーン朝宮廷およびイラン文化圏の共通語を指す。アフガニスタン政府は、イラン・ペルシア語に対しアフガニスタン色を強く打ち出す意図で、より古い呼称である Darī を近年になって採用したが、民間レベルでは現在もなお、「ペルシア語」を表す Fārsī のほか、Kābolī, Panjshīrī, Herātī, Darwāzī, Hazārāgī, Aimāqī など、話し手の地域・民族名を冠した個別名称が通称となっている⁽²⁾。

ペルシア語を母語とする上記の民族に加え、ガルチャ（ワハン回廊～パミール高原部）⁽³⁾、アラブ、ユダヤ、ジャート等のコミュニティーでは、各々の固有語とペルシア語との併用が一般的である。これらのなかには、すでに自らの言語を捨て、ペルシア語のみを母語とするようになった話者も多数存在すると考えられる。CIA World Factbook による言語人口では、アフガン・ペルシア語またはダリー語50%、パシュトー語35%、トルコ系言語11%、その他30の少数言語4%と報告されている。これを同報告の民族構成（パシュトゥーン42%、タジク27%、ハザーラ9%、アイマーク4%等）と対照すると、パシュトゥーン内でもダリー語を母語とする話者が少なからず存在することは、想像に難くない。

ダリー語とペルシア語（テヘラン標準語）は、文法体系では本質的に大

きな違いはみられず、音声・語彙の面でのみ相違が顕著である。音声面では、ダリー語では、テヘラン標準語ではすでに失われた、i / ē, ū / ō の弁別性が保たれている (ex. ダリー語 shir 「乳」: shēr 「ライオン」, テヘラン標準ペルシア語 shir 「乳, ライオン」)。語彙面ではインド・アーリア系言語からの借用語 (言語によってはモンゴル系言語, パシュトー語等) が多くみられる。また、近代化によるヨーロッパ系言語からの借用語が、テヘラン標準語ではフランス語の影響を強く受けているのに対し、ダリー語は、英語の借用語を多く含む。

2. パシュトー語

1936年の勅令において、正式にアフガニスタンの国語として定められたパシュトー語は、古くはスキタイ系民族のことばの流れを汲む言語と考えられている。

パシュトー語は、ペルシア文字 32 文字に固有の 8 文字を足した、計 40 文字で表記される。音声面では、そり舌音があり、語頭子音連続が多いのが特徴で、形態面では、名詞の性・格の別が屈折によって表され、過去時制における能格構文をもつなど、一方の公用語であるペルシア語に比べて、より古形を保ち、複雑な文法体系を有する。このことは、母語話者集団 (パシュトゥーン) が民族勢力的には圧倒的優位に立ちながら、言語のうえでは第 2 位に甘んじる一大要因ともなっている。語彙面ではインド・アーリア系の借用語を大量に内包するのが特徴である。

パシュトー語は、一般に、パキスタン北西辺境州を中心とする北東方言 (いわゆる Hard Pashto), カンダハールを中心とする南西方言 (Soft Pashto) とに二分分類され、音声面では x/g/s/z/dʒ/ と ʃ/ʒ/ts/dz/ʒ/ が対応する。これらの二大方言は互いに連続的に入り組んでいるため、さらに中間的な第 3, 4 の下位方言を認める場合もある。アフガニスタン側のパシュトー語人口は、CIA World Factbook から算出すると約 1300 万人余である。

なお、語源説の是非はさておき、‘afghān’ は、非パシュトー語話者、

とくにペルシア語話者側からみたパシュトゥーンに対する他称である。パシュトー語話者は自らの言語を *pashtō* と呼んでいるが、非パシュトー語話者はパシュトー語を *afghānī* あるいは *awghānī* と呼ぶ。

第3節 アフガニスタンにおける言語政策

古来より東西交易の要衝であり、さまざまな人、モノ、文化等の中継地点であったアフガニスタンでは、歴史的に、アヴェスター語、バクトリア語、中期ペルシア語等のイラン系言語、アラム語等のセム系言語、トルコ系・モンゴル系など、数多の言語が使用されてきた。このなかで、イラン系言語は、シルクロードの繁栄と共に、この地域を行き交う人びとをつなぐリンガ・フランカとしての役割を果たしてきた。とくにイスラーム期になると、本来アラブ系民族名を指す *tājik* の意味が、中央アジアではペルシア語を話すイスラーム教徒へと変遷したことが示すように、ペルシア語は、自身に大量のアラビア系語彙を内包し、高い混交性・柔軟性を武器に、イスラームを東方世界へ拡大させる媒体となっていくた。一方で、豊富な文学伝統を誇るペルシア語は、各時代の宮廷でもてはやされ、地域の文化教養語として、広大なペルシア語文化圏を形成してきた。

このような伝統的ペルシア語優位の状況に対し、アフガニスタンでは、パシュトゥーン国家意識の高揚と共に、1920年代よりパシュトー語奨励の気運が見え始めた。1936年には、勅令によりパシュトー語が国語（または公用語か未詳）となり、1937年には、従来の文学協会とパシュトー協会を統合してパシュトー語アカデミーが設立され、同語の普及にかかわる、研究・教育・出版等の活動が行われた。また1938年には政府役人にパシュトー語の使用が求められるなど、地域のコイネーとして君臨してきたペルシア語に対し、パシュトー語にもその起源的正統性を求め、国の主要言語として普及させようとする動きがみられるようになった。1964年憲法では、パシュトー語とダリー語が公用語であることを明らかにする初の条項が設けられ、この条文は2003年憲法まで継承されている。ちなみに第35

条では、パシュトー語のみを国語（National Language）と認め、その発展を図る旨の条文があるが、ここではダリー語は国語としては規定されていない（この条文は1976年憲法では撤廃）。このような事実は、以後のパシュトゥーンと非パシュトゥーン部族との軋轢を生む原因ともなった。

ソ連によるアフガン侵攻後の1980年には、ソ連の少数言語政策の影響下で、アフガニスタン国内の諸言語に対し、以下のような分類が設けられた：1）公用語（Official Languages）：ダリー語、パシュトー語 2）国語あるいは国定語（National Languages）：バルーチ語、ウズベク語、トルクメン語、パシャイー語、ヌーリスターン語（カティー語）、3）民族語（Local Languages）：パミール語（パミール諸語を指すと思われる）、ヌーリスターン語（ワイガリー語、アシュクン語、プラスン語）、ブラーフイー語、ジャート語、4）その他（Residential Languages）。1）と2）の言語に関しては、各言語による放送、初等教育における言語教育が保障されたという報告があるが、詳細は不明である。

2003年憲法では、第16条において、国内で使用される言語のうち、パシュトー語とダリー語が国の公用語であること、1980年の言語区分2）およびパミール諸語が優勢な地域では、各言語を第3の公用語とすることを認めている。また、主要な少数言語名を個別に言及し、すべての言語に対して出版、マスメディアの自由を保障するなど、大幅に少数言語に配慮した内容となっている。一方で、国歌はパシュトー語によるとする条項も新たに加わった。

おわりに

アフガニスタンの言語分布の特徴は、Encyclopaedia Iranicaでも指摘されるように、各言語が互いに吸収されることなく、見事なコラージュを呈している点にある。このように異系統を含む多数の言語が存在しながら、個々の言語の独立性が比較的保たれてきた背景には、ペルシア語が民族間のコミュニケーション言語として、揺るぎない地位を保ってきたことが、

その一因としてあげられよう。20世紀以降行われたパシュト語普及に関する数々の試みにもかかわらず、アフガニスタンでは、共通語としての中心言語ペルシア語(ダリー語)を軸として、そこに支配民族の言語パシュト語とその他の民族の固有言語が展開する伝統的な構図は、今も昔も変わっていない。アフガニスタンは、アフガニスタンではない。言語勢力圏からみたアフガニスタンは、いわゆる *afghān-istān* 「非パシュト語話者から見た、パシュトゥーンの地」からは、恐らく最もかけ離れた存在である。

多重構造を成すアフガニスタンの言語状況は、各言語の分布図の上に、公用語との併用状況を記したシートを重ね合わせなければみえてこないし、これには言語調査にもとづいた、詳細なデータの裏づけが必須である。かつてモルゲンシュティルネらが各地を踏査して回ったように、消滅の危機にある言語が途絶える前に、テキスト等の一次資料収集を含めた調査が存分に行えるようになる時が来ることを願ってやまない。

〔注〕

- (1) SIL の報告によるペルシア語下位言語の話者数合計は、約 786 万人強である (Fārsī 560 万人, Hazārāgī 177 万人, Aimāqī 48 万人, Darwāzī 1 万人, Pahlavānī 2100 人)。
- (2) *Encyclopaedia Iranica* では、アフガニスタンで使用されるペルシア語の下位言語を、A) Kāboli に代表される東北部方言、B) ホラーサーン方言色の強い Herāti, Aimāqī 等の西北部方言、C) シースターン方言 (Sistāni), D) モンゴル系言語の影響が強い中央部のハザーラ方言 (Hazārāgī) の 4 グループに分類している。この分類は民族ではなく地域によるもので、たとえばタジクやハザーラは、話者の居住地域によって複数の方言グループに属している。
- (3) ペルシア語は、ワハン回廊からパキスタン北部地域にかけて分布する、イスマエール派教徒にとっての共通語でもある。

〔参考文献〕

- 縄田鉄男『アフガニスタンの言語概観－複雑な民族構成とその言語』平位剛『禁断のアフガニスタン・パミール紀行－ワハン回廊の山・湖・人』ナカニシヤ出版、2003年。
- 『パシュト語文法入門』大学書林、1985年。
- フォーヘルサング、ヴィレム著 前田耕作、山内和也監訳『アフガニスタンの歴史と文化』、明石書店、2002年。
- 前田耕作、山根聡『アフガニスタン史』河出書房新社、2002年
- 「カーフィル諸語」、「ダルド諸語」、「パシュト語」『三省堂言語学大辞典』三省堂書店、

- 1988 年 .
- “Afghanistan (iv.Ethnography, v.Language)” in Yarshater, E. (ed.) *Encyclopaedia Iranica* vol.1 pp. 495-525. 1985. Routledge & Kegan Paul, London.
- CIA, *The World Factbook*.
- Dupree, Louis. 1978, *Afghanistan*, Princeton University Press.
- Grimes, Barbara (ed.) 1998. *Ethnologue*. Summer Institute of Linguistics International. (ウェブ版 <http://www.ethnologue.com/>)
- Morgenstierne, Georg. 1938. *Indo-Iranian Frontier Languages II: Iranian Pamir Languages*. The Institute for Comparative Research in Human Culture, Universitetsforlaget, Oslo.
- Oranskij, I.M. 1977. (tr. by Joyce Blau), *Les langues iraniennes*. Librairie C.Klincksieck. Paris.
- Skjaervø, O, “Modern East Iranian Languages”, “Pashto” in Schmitt, Rüdiger (ed.) 1989, *Compendium Linguarum Iranicarum*. pp. 370-410. Ludwig Reichert Verlag. Wiesbaden.